懐徳堂アーカイブ講座を受講して

渡　部　晋太郎

平成20年11月７日に大阪大学豊中キャンパス附属図書館において開催された懐徳堂アーカイブ講座を受講する機会を得た。大阪大学附属図書館は懐徳堂文庫として貴重資料約５万点を収蔵しているが、関西大学図書館も内藤文庫や長澤文庫等の貴重資料を多数含む膨大な量の漢籍コレクションを収蔵している。そして、その公開のあり方をかねてより模索していたこともあって、同様な資料を抱える大阪大学附属図書館の懐徳堂コレクションの取り扱いが参考となるのではないかという動機によりこの講座への参加を希望した次第である。その期待に違わず、今回の懐徳堂アーカイブ講座では多くの参考となる講義内容と解説が行われたので、以下、その報告を行うこととしたい。

懐徳堂アーカイブ講座は懐徳堂データベースがWeb版として公開されたことを記念して平成15年から始められた講座で、今回参加した懐徳堂アーカイブ講座は第７回目にあたる。その内容は次の通り、講演二つと資料解説一つの３部構成よりなるものであった。

１　懐徳堂文庫の歴史 ―保存・公開・修復―

まず、大阪大学教授である湯浅邦弘氏による懐徳堂文庫の歴史についての講演が行われた。その歴史は、徳川幕藩体制下の懐徳堂の時代、明治以降の重建懐徳堂の時代、大阪大学への資料寄贈が行われた戦後の懐徳堂記念会の時代の３期に分けられるとのことであった。

その第１期である徳川幕藩体制下の懐徳堂の時代であるが、懐徳堂アーカイブ講座でも紹介された「新建懐徳堂」のWebサイトではこの時代の懐徳堂の歴史を次のように素描している。

> 享保９年（1724）年、大坂の地に異色の学問所が誕生した。「懐徳堂（かいとくどう）」と名付けられたその学問所は、五同志（ごどうし）と呼ばれる大坂商人たちによって運営され、受講生の大半もまた町人たちであった。２年後に江戸幕府から官許を得た後も、昌平黌（しょうへいこう）や諸藩の藩校、あるいは高名な儒者の主宰する私塾とは異なって、儒教的な倫理道徳を基盤にしながらも、自由で批判精神に満ちた教育と研究を展開していった。
>
> ことに、膨大な経学研究を残した中井竹山（なかいちくざん）・履軒（りけん）兄弟の時がその黄金期であり、さらに、富永仲基（とみながなかもと）、山片蟠桃（やまがた）らの近代的英知が輩出した。
>
> しかし、幕末・明治維新の混乱により、明治２年（1869）に閉校。
>
> （http://kaitokudo.jp/kaitokudo1/Html_jam/nyumon/index.html）

この時代の解説の中で特に印象に残ったのは、幕末に懐徳堂の運営が困難になった際、中井竹山などの学主の著書の貴重な版木を運営資金のために一旦売却したが、後に八方手を尽くして買い戻したというエピソードであった。

さて、明治２年（1869年）に閉校になった後、大正の初めに西村天囚（にしむらてんしゅう）らの奔走によって懐徳堂記念会が財団法人として認可され、重建懐徳堂が竣工し、懐徳堂文庫にとっては第２期である重建懐徳堂の時代が始まることとなる。そしてこの時代において最も重要な事業となったのは大正15年（1926年）に重建懐徳堂10周年記念として企画された懐徳堂書庫の建設である。というのは、昭和20年（1945年）に大阪大空襲により重建懐徳堂が消失してしまったのであるが、この懐徳堂書庫が建設されていたことにより懐徳堂の蔵書は戦災を免れたからである。講師の湯浅教授が「歴史の奇蹟」と語っていたのが印象的であった。

こうして戦災を免れた懐徳堂の蔵書は昭和24年（1949年）、一括して大阪大学に寄贈され「懐徳堂文庫」と名付けられる。その当時、大阪大学附属図書

館本館はまだ建設されていなかったため、文学部がその受入先となって整理にあたったのだった。その後、昭和35年（1960年）に附属図書館本館の第一期工事が完成した際、一部を図書館に移転し、昭和41年（1966年）に第二期工事が完成したのに伴って、一括して図書館に収蔵されるに至った。そして、平成13年（2001年）に附属図書館新館が竣工した後、その6階貴重図書室に懐徳堂文庫が移転され、現在に至っている。

以上の懐徳堂文庫の歴史の中で、近年最も大きなトピックと言えるのが、平成13年（2001年）の大阪大学創立70周年記念事業として企画された懐徳堂貴重資料のデータベース化および懐徳堂CGの公開であった。それらのコンテンツは現在、「WEB懐徳堂（http://kaitokudo.jp/）」として公開されており、インターネットを利用して誰でもアクセスすることが可能である。

2　貴重資料の電子化 ～公開の新しい可能性～

湯浅教授による懐徳堂文庫についての講演に続き、「貴重資料の電子化～公開の新しい可能性～」という題で、凸版印刷の森田敬子氏による講演が行われた。その内容は前述した大阪大学創立70周年記念事業の企画から始まる懐徳堂関係の様々な電子化事業の経験を中心としたもので、今後所蔵資料の電子化を検討している機関にとっては非常に参考となる内容であった。

その講演はまず、この講座のタイトルにも含まれている「アーカイブ」についての解説から始まった。アーカイブ（Archive）とは辞書的には「公文書保管庫・記録保管所」と訳され、重要な書類を集めて大切に保管する場所を意味している。歴史的には、世界最初のビジネスアーカイブが紀元前2000年にカッパドキアのクルテーベから始まり、現在、米国国立公文書館など、多くのアーカイブ機関が設立されている。

これらのアーカイブは紙媒体の文書の保管がその主な役割であったわけであるが、近年のコンピューター技術の発達により資料をデジタル化して保存する技術が開発されるに至った。これが「デジタルアーカイブ」と呼ばれるもので、日本においても国立公文書館が「国立公文書館デジタルアーカイブ」という名のサイトにおいて多くの所蔵資料を公開している（http://www.digital.archives.go.jp/）。総務省の説明によると、「デジタルアーカイブとはデジタルコンテンツの蓄積・保存を行うためのシステムの総称」であり、単にデジタル化されたコンテンツのみを指すものではないとしている。その意味で国立公文書館のWebサイト「国立公文書館デジタルアーカイブ」はデジタル化されたコンテンツとその公開するシステムとが一体となったものであるので、総務省の言う「デジタルアーカイブ」の概念を最もよく体現しているものだと考えられる。

総務省は更に、今後はコンテンツの「創造→蓄積・保存→利活用→さらなる創造」、すなわち「デジタル資産の活用」サイクルを展開するための重要なインフラとして期待が高まっているとの認識を示しており、これまでどちらかというと活用よりも保存に力点が置かれていたアーカイブがデジタルアーカイブを導入することによって資料の活用が促進される可能性を見出していることが窺える。

では、このデジタルアーカイブはこれまでのアーカイブとはどう異なり、具体的にどのような特徴を有しているかというと、森田氏はデジタルアーカイブが付加価値として実現することとして次の3点を挙げている。

(1)　時間的、空間的な制約を受けない（時間を遡及する）
(2)　視点を拡張し、不可能な視点を可視化する
(3)　新たな価値を見出す

これまでアーカイブにおいては資料の劣化のリスクを避けるため、資料の公開にはどうしても積極的になれない事情があった。しかし、デジタルアーカイブを導入することにより資料の劣化のリスクを抱えることなく公開することが可能となり、しかもそれは上記のように展示会などにおける資料公開のレベルに留まらないことを森田氏は指し示したのであった。

ここで、森田氏は自身が実際に手がけたコンテンツである「ヴァーチャル懐徳堂」を取り上げ、その内容の具体的な説明がなされた。「ヴァーチャル懐徳堂」とは失われた懐徳堂の建物をデジタル的に再現するというもので、大阪大学創立70周年記念事業の一つとして企画されたものである。残された図面と文献に残る記述に基づいてCGによりデジタル新建築として再現すると同時に、カメラ視点移動の設定、データベースとの連動などの特徴を持たせている。その際、建物の中にある器物をデジタル的に復元するにあたって、様々なデジタル復元技術が活用

された。一つは、経年劣化を除去するデジタル復元技術、もう一つは喪失を取り戻すデジタル修復技術である。例えば、汚れや日焼けなどにより変色した掛軸の絵に色彩修正等を施すことによって鮮明化させたり、拓本の文字の欠損部分について、記録の文言と残された部分の筆跡に基づき書き起こしたりする技術などがそれに相当する。

また、初心者向けのコンテンツとして影絵アニメーションである「懐徳堂物語」を用意し、予備知識無しに懐徳堂のおおまかな歴史が把握できるよう工夫をこらしている。更に、研究者向けには研究成果の全文テキスト化を行っており、このようにコンテンツの総合化が図られた結果、平成13年（2001年）に懐徳堂の総合コンテンツとして「新建懐徳堂」が公開されたのだった。その中でも「懐徳堂データベース」は研究者向けコンテンツとして特に充実しており、懐徳堂の貴重資料から100選したものを電子化してデータベースへ格納し、画像、全文テキストデータ、解題、解説、翻刻、現代語訳がパソコンの画面上で閲覧できるようになっている。

そして、平成15年（2003年）には懐徳堂デジタルアーカイブ事業の集大成をめざして、以上のデジタルコンテンツを「WEB懐徳堂」としてWeb上で公開することになった。このサイトのURLであるhttp://kaitokudo.jp/ にアクセスすると、平成21年（2009年）１月現在、電子展示室において、懐徳堂印、懐徳堂四書、懐徳堂『左九羅帖』、印章展示、絵図屏風展示、CG懐徳堂WEB版といったコンテンツを利用することができるようになっている。

ここで、新しい公開手法としてのヴァーチャルリアリティ（VR）についての説明が行われた。森田氏が勤務されている凸版印刷においてはヴァーチャルリアリティのシステムとしてTOPPAN　VRシステムというものを開発している。そのシステムを使った具体的なコンテンツとしては平成11年（1999年）公開の「唐招提寺」、平成15年（2003年）公開の「禁紫城・天子の宮殿」、平成18年（2006年）公開の「ナスカ」などがあるが、これらのコンテンツにおいて仮想現実、人工現実感、疑似体験といったヴァーチャルリアリティの特色が、①高度な芸術性、②学術的な資料価値、③高精細画像処理技術を伴いつつ、自由自在に視点移動できるインタラクティビティというヴァーチャルリアリティならではの機能と共に実現していることが森田氏の解説により示されたのであった。

このように森田氏は「ヴァーチャル懐徳堂」を始めとする様々なデジタルコンテンツの紹介を行いつつ、貴重資料の電子化の事例とその公開の新しい可能性について説明されたのであるが、その一方で、あくまでも公開に資するものとして技術を活用することの大切さにも触れている。電子化技術は今なお発展途上であり、最先端技術も急速に古びていく運命を免れない。例えば、懐徳堂関係のコンテンツであるデジタル復元された懐徳堂学舎の『知の光彩――未来へ』は当時の最先端技術であるフルハイビジョンCGにより制作されたものであったが、現在ではより高品質なCGの製作環境を個人レベルでも用意することができる。また、前述した入門者向けアニメーション『懐徳堂物語』も、当時は目新しかったFlashにより制作されたものであったのだが、これも現在ではすっかりポピュラーな技術と化している。にもかかわらず、それぞれのコンテンツが今なお鑑賞に耐え得ているのは、「感動を分かりやすく伝える」という公開コンテンツを作成する基本に忠実であったためであろうとのことである。

技術は刻々と変化・発展したとしても、電子化して公開する内容の「本質」は時代を経ても変わることがない。それ故、貴重資料の電子化は、その資料の本質を理解するところから始まるわけであり、「懐徳堂」の貴重資料もまた、富永仲基、山片蟠桃を生み出した無限の可能性を秘めた知の遺産としての認識から出発することになる。そして、こうした本質を理解した上で電子化し、それを公開するというプロセスは、思索・イメージシミュレーションの軌跡であると言うことができると森田氏は結論するのである。

3　資料解説

最後に、懐徳堂の貴重資料の解説が、二つの班に分かれて実物を収めている別室にて行われた。解説者は大阪大学助教の池田光子氏で、長年懐徳堂資料の整理に当たられた現在最も懐徳堂資料にお詳しい方であるとのことだった。以下、池田光子氏による「第八回懐徳堂アーカイブ講座二〇〇八　資料解説」に基づき、そこで解説された懐徳堂資料を紹介することにしたい。

(1) 懐徳堂額字

懐徳堂初代学主三宅石庵（1665～1730）の筆によ

る「懐徳堂」の３文字の掛け軸で、今は掛け軸となっているがもとは額に入れて懐徳堂の講堂に飾ってあったものである。

(2) 中井竹山肖像画

懐徳堂の４代学主中井竹山（1730～1804）の肖像画で、描いた人物は、山水人物を得意としていた中井藍江（1766～1830）である。上部には竹山の賛が記されている。

藍江は竹山に詩文を学んでおり、寛政10年（1798年）正月の宴席で書画が競い作られた時、ある人物に勧められて藍江が竹山の講座の像を描いてできたのがこの肖像画である。肖像画作成の際、自賛を求められた竹山は、酔いつつもその場で賛を加えたのだった。

竹山はかなり豊かな体つきだったらしく、その様子が輪郭・体の線によく表されている。後ろ向きではあるが、竹山の容貌をよく伝えている貴重な資料である。

(3) 大阪府学教授印

中井竹山が用いていた印の一つである。篆刻者は前川虚舟（1735？～？）、石印で紐（つまみ）は桑の木でできている。文字が朱色になるように凸状に彫られている「暘刻」、印分を囲む枠が一重である「単郭」という特徴を持っている印でもある。懐徳堂文庫には、約240顆の懐徳堂関係の印が保管されているが、その中でも大阪府学教授印は、一辺が５cmほどの立派な印章となっている。

(4) 青貝印匣

竹山らの印を納める保管箱として用いられていた小さい箪笥である。印章がきちんと整理して収納できるように、それぞれの引き出しの底には、印影を捺した紙が貼ってある。

青貝印匣は彫刻刀での細かな裁断や細工など、繊細な技巧が施されており、螺鈿（貝殻の真珠層の部分で器物の表面を飾ること）の技法から、おそらくは18世紀頃の中国で造られたものと思われる。

(5) 白鹿洞書院掲示拓本

白鹿洞書院掲示とは、中国の南宋時代の朱子が白鹿洞書院を再建する際に定めた学生心得である。教育の大綱を表したものとして中国をはじめとし、日本でも用いられた。これを竹山の二つ下の弟である履軒（1732～1817）が抄写したものの拓本が白鹿洞書院掲示拓本である。懐徳堂においてこの拓本は額に入れられ、懐徳堂堂内に飾られていた。

白鹿洞書院掲示拓本に書かれている内容は、中国の古典の中から引用して、教学の原則を記したものである。例えば破損している右端には、「五教之目（五つの教え）」として『孟子』から「父子親有り、君臣義あり、夫婦別有り、長幼序あり、朋友信あり」のことばが、左端の「接物之要（人に対応するかなめ）」には、『論語』の「己の欲せざる所を人に施すこと勿かれ」のことばが引かれている。

(6) 帰馬放牛図

谷文晁（1763～1840）が、寛政８年（1796年）頃に懐徳堂にしばらく逗留した際、竹山の求めに応じて襖に描いたものである。多くの文人墨客と交流をもっていた文晁が懐徳堂とも深い交流を持っていたことをこの襖絵は証立てている。

現存している帰馬放牛図は襖から外し、双幅に仕立て直したもので、襖絵であった名残が引手の跡から窺える。この帰馬放牛図の他にも懐徳堂には文晁の襖絵がもう一つあったのであるが、それは残念ながら現存していない。

この帰馬放牛図は谷文晁の作品であるというだけでなく、懐徳堂が当時の文人達と広く交流を持っていたことを示す貴重な資料の一つとなっている。

4　最後に

関西大学図書館では、図書館のウェブサイトを通じて各種コレクションの目録など、様々なコンテンツを学外へ提供している。中でも「電子展示室」は特に充実したコンテンツページであり、伊勢物語の嵯峨本や戦国武将の書状などが高精細画像で閲覧できるようになっている。今回受講した懐徳堂アーカイブ講座は、関西大学図書館ウェブサイトにおける「電子展示室」のあり方を「Web懐徳堂」との対比の下で再考するきっかけを与えてくれることとなった。近年、大学で生み出された研究成果を各大学の学術リポジトリを通じて公開することがトレンドとなりつつある昨今、定型的なフォーマットに縛られず電子化資料の特性を最大限活かした公開のあり方の大切さを懐徳堂アーカイブ講座の受講により痛感させられた次第である。

（わたべ　しんたろう　図書館事務室）